

追悼 田中富士夫先生

札幌学院大学 田 形 修 一



送別会での田中富士夫先生（2001年3月）

本学会名誉会員の田中富士夫先生は、2006年10月21日午後7時24分、肺炎のため亡くなりました。享年76歳でした。

以前より体調を崩され、2年程前から筋萎縮性側索硬化症のためご自宅で療養されておられました。心理臨床家の資格問題をめぐって、大きな動きのある昨今の心理学界にあって、今のようなときにこそ、先生が存在が必要なのだと思っておりましたので、大きな支えを失ったというほかありません。

先生は、1930年9月8日北見市にお生まれになりました。第四高等学校に入学されますが、戦後の学制改革にともない1949年に1年で修了され、1953年に金沢大学法文学部哲学科心理学専攻をご卒業になりました。その後、石川県事務吏員、法務技官を経て、1955年10月より金沢大学法文学部（後に文学部）に35年間在職され、1990年より中京大学文学部心理学科（後に心理学部）に11年間、2001年より金城大学社会福祉学部で3年間と49年の間教鞭をとられてこられました。

大学人としての姿勢、学問への姿勢、学生に対する態度に、私は実に多くのことを学ばせていただきましたが、今でも思い出すことがあります。謝恩会の折に学窓を巣立つ学徒にむけて饒のことばの中で、「君たちがこれから社会に出ていけば、これまでと違って白を黒、黒を白と言わなくてはいけないようなこともあるだろう、そんな時に迷ったら大学に尋ねてきなさい。白は白、黒は黒とはっきりと言ってあげるから、…」と言われたことがあります。これは、先生の大学人としての、真理の追求を目指す学者としての姿勢の一端を示していると思います。

学会へのご貢献について述べますと、本学会では、1982年から会長の任にあたられ、その後、運営委員（現理事）、常任運営委員（現常任理事）を歴任されておられます。学会等での活動は、先生のご研究の幅広さを反映して、本学会だけににとどまらず幅広く多様で実に多くの学会運営へ積極的に参画されておられます。ロールシャッパ研究誌の編集委員、行動療法学会編集委員、日本心理臨床学会倫理委員長、日本電話相談学会理事長、日本臨床心理士資格認定協会評議員、日本ロールシャッパ学会理事、MMPI 新日本版研究会代表等々を歴

任されてられました。年次大会の開催について主なものを挙げましても、1983年日本応用心理学会第50回大会、1985年には日本行動療法学会第11回大会、1995年の日本性格心理学会第4回大会（現日本パーソナリティ心理学会）、1996年の第22回コミュニティ心理学シンポジウム（現日本コミュニティ心理学会）、1998年の日本電話相談学会第11回大会など実に多くの学会開催にあたっておられます。学外でのお仕事も多く、金沢のご自宅と、東京での会議、名古屋とご多忙な生活でした。

先生の目指された臨床心理学は、サイエンティフィック・プロフェッショナルな指向性をもったものであると言えると思います。金沢大学の臨床心理相談室の紀要「臨床心理学の諸領域」を1982年に創刊されておられますが、巻頭言に以下のような記述があります。先生の目指された臨床心理学の方向性が示唆される文章であると思い引用しました。

…筆者が大学を卒業して訳も判らぬまゝに心理臨床業務に携わらずを得なかった50年代に比べて、昨今の臨床心理学は著しい変貌を遂げたというより、ある意味では混沌とした捉え難い状態にあるかに見える。行動論的アプローチや第三勢力の台頭がもたらした理論モデルの多様化だけでなく、コミュニティ心理学のように伝統的な心理臨床家のイメージとはおよそかけ離れた業務に携わるサイコロジストが要請されているのが現状である。これが本誌を「臨床心理学の諸領域」と名付けた一つの理由でもあるが、もう一方では、臨床心理学というからには、異常行動の基礎研究、査定法や介入法のリサーチ、技術研究、それに事例研究といった多様な方向を目指したいという気持ちのあらわれでもある。…

先生のご研究のテーマについて述べますと、心理査定、ロールシャッハ・テストに関する研究、MMPIに関する研究、食行動の異常、電話相談による地域援助など幅広いものであります。

先生のライフワークでもありましたMMPI研究は、金沢でのMMPI研究会を基にして、中京大学へ移られてからはMMPI新日本版研究会を組織して、1993年にはMMPI新日本版の標準化研究も行っておられます。1995年には「MMPI研究・臨床情報交換誌」を創刊し、研究会代表・編集委員長として研究会を指導してこられました。（2004年からは、木場清子代表、武山雅志事務局長という体制に引き継がれ今日に至っております。）

学部時代に恩師の片口安史教授から、「金沢の田中さんを納得させる論文を書くのが夢だ」といわれたのを今でも覚えております。私がはじめてお目にかかったのは、大学院に進んでからでしたから、30年ほどご指導いただいたことになります。愛煙家で、コーヒーと缶ピースがセットのゼミは、禁煙運動の盛んな現在では懐かしい思い出です。学会会場で先生を見失っても、建物の外にある喫煙コーナーに行けば、そこには必ずと言っていいほど他の研究者と懇談される先生を発見することができました。今でも禁煙できない私は、喫煙コーナーに行けば先生のお元気なお姿にお目にかかれるような気がして足が向いてしまいます。

まだまだご指導いただくことが多く、大きな支えを失ったというのが実感でございます。

10月24日のご葬儀では、四高以来の友である多田治夫先生（金沢工業大学心理科学研究科科长）の弔辞と、最後は四高南寮寮歌「北の都に秋たけて」に送られての旅立ちでした。

今後は、先生からいただいた多くのものを、次の世代へどのように継承していくのか、自らの教育・研究を通して取り組んでいかねばならないと思います。

先生のご冥福を心からお祈りいたします。